

あんげろす

引っかけり

高木久夫

それは昨秋、1本の外信に接した時のことだった。長く忘れていたが、わたしは明治学院大学に奉職早々、図書館入口に大きく掲げられたヨハネによる福音書の聖句「真理はあなたがたを自由にする」(8:32)を目にして感じた、強い引っかけりを思い出した。

外信は、ハマスのイスラエル侵攻1周年を機に平和のための祈りと断食を呼びかけた教皇フランシスクスの書簡を報じていた。書簡は真摯に平和を求め、同じ章を引いて戦争を煽る悪しき霊を「初めから人殺し」で「偽り者であり偽りの父」(8:44)と呼んだ。自身を信じたユダヤ人たちを批難したこのイエスのことばを、気高くもオリゲネスは欲望に駆られる人間性への叱責と解した。他方アレクサンドリアのキュリロスは「イエスを殺したユダヤ人たち」への復讐の呼びかけと喧伝した—後者の解釈は教会のもっとも陰惨な記憶の背景に幾度もその暗い顔を覗かせる。教皇の書簡は一部で物議を醸したという。

自由にされる「あなたがた」とは「人殺し」「偽りの父」と呼ばれた者たちであり、自由にする「真理」は、(同章の他の箇所でおなじギリシア語をそう訳すとおり)イエスの証しの「真実」であって、批判的・学問的な「真理」とは無縁と言える。それにしてもなぜ、かつて強く感じたあの引っかけりを、わたしは忘れていたのだろうか。



たかぎ・ひさお(所員)

第96号

2025年3月

井深先生に叱られる!?

松本智子

明治学院大学キリスト教研究所と明治学院歴史資料館の協働プロジェクトによる『井深梶之助日記 大正編』が刊行された。昨年の明治編に続く第2冊目。残りは昭和編だけとなった。ありがたいことに私も編集委員の一人として携わらせていただいている。

大正編の中で少し気になっていることがある。

何事ぞ「真の道」を教へたる

神の祭に「うそ」のやりとり

これは井深作の狂歌（自ら狂歌と称しているので、ここでも狂歌と呼ぶ）で、1913（大正2）年1月2日条に記されている。井深は前年12月18日から、日本基督教会伝道局の用務のため満洲に出張し、その帰途、長女千代とその夫荒川文六が住む福岡に寄って、そのまま1913年の正月を迎えた。2日には文六のつとめる九州帝国大学の総長であり、ともに戊辰戦争を戦った山川健次郎を訪問。その後、鉄道にて博多から二日市に向かい、二日市からは馬車鉄道を利用して太宰府へ。菅原道真を祀る太宰府天満宮を参詣の後、天満宮の後方にある宝満山の山頂へ登った。標高829.6m。日記には「眺望中々ヨシ。奈良ニ似タル所アリ」と記されている。山頂を後にした井深は、天智天皇の発願で創建された観世音寺に立ち寄り、木像や梵鐘などを見学。梵鐘は日本最古として知られ、道真の漢詩「不出門」にも出てくる名鐘だ。現在国宝に指定されている。最後に太宰府政庁跡を見て文六宅に帰着。その日、井深は、太宰府にて同月7日に盛大な「ウソカへ」があることを知り、「何事ぞ」の狂歌を詠んだ、というのが経緯だ。

「ウソカへ」とは、^{うそか} 鶯替え神事のこと、太宰府天満宮のホームページによると、毎年1月7日の夕刻に行われるとのこと。鶯はスズメ目アトリ科の小鳥。前の年に知らず知らずのうちについたすべての嘘を、天神さまのまことの心と取り替えるというもので、参詣者は「かえましょ、かえましょ」の声とともに木鶯（木彫りの鶯）を交換し、最後に手元に残った木鶯を、嘘がまことの心にかかわった証と

して持ち帰るという。また、木鶯を新しいものに交換することで、災いを「嘘」に替え、良い年になるようにと祈る、開運招福の意味合いもあるようだ。

都内でも1月25日に湯島天神で鶯替え神事が行われていることを知り、どんなのかと訪れてみた。木鶯の授与が始まる午前9時頃に着くと、既に長蛇の列。普段の私なら絶対に並ばないが、木鶯を目的に来たからには致し方ない、並ぶ一択。40分後ようやく順番が来て、いざ巫女さんの前へ。湯島天神の木鶯は大小2種類。両方をいただく。太宰府とはちがって、掛け声はない。参詣者同士の交換もないが、前年の木鶯を備え付けの箱にもどすことで「やりとり」が完了するのだろう。前年の木鶯を持たない私は、ひとまず、やりとりの「とり」を達成した。

井深の狂歌は、「まことの道」を説いた神（菅原道真公）の祭りで「うそ」のやりとりを行うとは何たることだ（けしからん!）と怒ってみせている。ことば遊びに興じる井深のユーモラスな一面が垣間見えておもしろい。道真作と伝わる和歌「心だにまことの道にかなひなば祈らぬとても神や守らん」を踏まえていることは言うまでもない。

私は福岡出身で、幼いころから太宰府天満宮にはよくお参りに行っていた。けれども天満宮の鶯替え神事については井深の日記を読んで初めて知った。宝満山に登ったことはなく、観世音寺にも行ったことがない。私事で恐縮だが、3月末、25年暮らした関東を離れ福岡へ戻ることになった。新居から太宰府までは電車で20分ほど。よい機会なので、井深が登った宝満山の山頂を目指してみようと思っている。井深と同じ景色を眺めてみたい。観世音寺にも行ってみよう。国宝の梵鐘は全国各地によく貸し出されるらしいから、しっかり下調べもして。

と書きながら、完全インドア派の自分が果たしてこれらを実行できるのか、正直自信はない。

でもここに書いたことが嘘になっても大丈夫。これからの私には、太宰府天満宮の「ウソカへ」があるのではないかと。井深先生に「何事ぞ」と叱られそうだけれど。

まつもと・ともこ（協力研究員）

「ラニョーを読んでみませんか」と指導教員から勧められたのは、博士課程に進学して少し経ってからのことだった。ちょうどそれまで取り組んでいたメルロ＝ポンティの研究をどう深めるべきか決めあぐねていた時期でもあったので、それが一体どんな思想の持ち主なのか、テキストにどんな難しさがあるのかもろくに知らぬまま「読んでみます!」と飛びついた。

テキストはジュール・ラニョー (1851-1894) の『名講義集』(*Célèbes leçons et fragments*) で、そのなかの「知覚についての講義」を中心的に読むこととなった。『名講義集』は、ラニョーの没後に、かつてリセ (高校) で学んだ元生徒たちのノートをもとに編纂されたものである。そのため、そこにラニョー本人の手による解説などは一切ない。ラニョーが授業の準備段階で何を参照していたのかも明確にはわからないから、自分であたりをつけて読んでいくほかはない。こうした講義録特有の難しさに加えて、文章そのものも晦渋で苦戦した。読みにくさの原因がテキストの言い回しにあるのか、自分のフランス語の読解力にあるのかさえもわからない。先行研究も乏しく、自分の解釈にも確信が持てなかった。毎日が文字通りの手探り状態で、「読んでみます!」とあまりにも簡単に答えたことを後悔さえした。

そんなときに手に取ったのがアランの『ラニョーの思い出』だった。『ラニョーの思い出』からは、アランが師ラニョーに学んだ日々の回想を中心に、ラニョーの歿後に講義録が編まれるに至った経緯なども窺い知ることができた。なかには、今後のテキスト読解に直接的に役立つであろう、当時ラニョーが授業で用いていたテキスト等の情報も記されていたのだが、なぜかそれよりも強く印象に残ったのは、アランがラニョーの授業を精神の暁と重ね合わせて「朝」と表現した一節だった。

初めて見た、直接見たものは何ものでもない。

我々が外観と真理を一緒に捉えることができるのは、熟考によってのみであるからである。純然たる夢の特性は、それが誰にとっても何ものでもないことにある。だが、外観は再び見出された夢なのだ。目覚めとして熟考は、目覚めとしての知覚と同時に、かくの如くに分析されたのであった。この精神の暁は驚くべきものである。誰もがこれに厭きることを知らない。私にとっては、いまだにその都度新たなのである。しかし人は、それは済んだことにして、結論に向って突き進みたいのであろう。だが、それは平凡に終わる一日である。教室は、あの建造物を思わせる顔と同じく、常に朝であった。(アラン『ラニョーの思い出』、中村弘訳、筑摩書房、1980年、68頁)

この一節を読んだとたん、こんなふうには生徒を知の目覚めへと導く授業とはどんなものであったのか、ラニョーの思想の核心に何があるのかを知りたいと強く思った。と同時に、以前指導教員が「研究者とは山師のようなものです」と話してくれたのを思い出した。掘ったところで鉦脈は見つからないかもしれない。でも、掘ってみなければ分らない。ふと思い出したその言葉に背中を押された。ラニョーのテキストを、わからないなりに読み進めてみようとした。研究とは慎重で繊細なものだとばかり思っていたが、時には大胆な賭けも必要になることをその時に身をもって知った。

幸い、鉦脈は見つかった。ラニョーの「知覚についての講義」は、ラニョーの思想的特徴を示すと同時に、知覚論を現象学以前と以後で明確に線引きをする見方に対して、別の視点も与えてくれた。ラニョーの知覚論は、一見する限りでは現象学以前の伝統的知覚論の域を出ないようにもみえる。事実、ラニョーは現象学以降の哲学者からは「観念論者」とカテゴライズされてきた。しかしよく読んでみると、それは単なる観念論には収まりきらないことがわかる。ラニョーは知覚における精神のはたらきを強調する一方で、身体役割を排除することなく「予見 (prévoir)」

という行為に着目し、知覚的「判断」を身体と精神の協働によって成り立つものとして捉えているのである。この発見は、ラニョーを哲学史のなかにどう位置付けることができるのか、という次なる問いにつながった。

掘るべき場所を見極め、思い切りよく進み、そしてまた慎重に手を止める。この繰り返しが新たな問いへと開かれていく限り、テキストを読み続けたい。

やまもと・りりこ（所員）

雑録

田中祐介

3階建て集合住宅の2階に位置する我が家のベランダからは、眼下に梅の木々が見渡される。大家の取り計らいで敷地内に植えられたもので、ちょうどこの雑録を書く時期に満開を迎えた。2月中旬から蕾が少しずつ綻びゆく様子を追い、紅白の花々が鮮やかに咲くに至るまでを見守るのは毎年の楽しみでもある。

梅の木々には鳥たちが集まり、晴れた朝の目覚めには幾種類もの囀りがよく聞こえる。寢床のままに耳を澄ませると、敷地外のさまざまな物音にも意識が向き、年末や年始とは音の伝わり方が微妙に変化したことに気づく。布団にくるまった寝室の冷気をまだ頬に感じながらも、外気の変化を思い、春の訪れが近いことを予感する。毎年このようにして時の移ろいを知り、一年ぶりに別れと出会いの季節を迎えることを実感する。当研究所も年度末の節目が近づいてきた。

客員研究員である棚木憲一郎氏はこの3月で任期満了を迎える。2年間にわたり研究教育活動に多大なご協力をいただいた。特に公開講座の運営では、今年度着任の鹿住輝之氏とともに大変お世話になった。心よりの感謝を申し上げたい。あっという間の在任期間であったが、その温かいお人柄でますます活躍されることを願っている。公開講座の仕事後に少し遅い夕食を度々一緒にしたことは忘れられない思い出である。

坂口緑所長は本学の研究サバティカル制度により今年度

末で所長職に区切りをつけることになった。私は主任としてこの1年間業務をご一緒したが、坂口所長の業務に関するお考えやご判断からは日々学ぶことばかりであった。そのような機会が一旦はなくなることは寂しい限りであるが、得られた学びを日々の仕事に活かしていきたい。サバティカルから復帰されたのち、研究所の諸活動で一緒にできる機会を今から楽しみにしている。

2016年度から2021年度までの6年間にわたり所長を務められた徐正敏所員は今年度末に定年退職を迎える。私が2021年度に主任に就任してお支えした際には、初めての役職経験で不慣れな後輩を温かく見守り、常に励ましていただいた。以後も今日に至るまで親身に接してくださり、主任業務を継続するうえでの原動力となった。ご厚情に対する感謝の念は尽きることがない。ご退職後も変わらずに親しい交流を深めていくことができれば何よりの喜びである。

今年度の公開講座は全20回の「アジアキリスト教講座」として対面実施することができた。2020年度の実施を計画しながら、新型コロナ禍を迎えたことで中止となったものである。感染拡大の苦しい時期であったが、2021年度は試行的に全面オンラインの「アジアキリスト教歴史文化講義シリーズ」（全8回）を実施し、2022年度は引き続きオンラインながら「アジアキリスト教講義シリーズ」（全10回）として規模を拡大した。2023年度には名称と規模は前年度を踏襲しながら全回を対面実施するに至った。今年度に晴れて全20回の対面実施という構成を取ることができたのは感慨深い。講義をお引き受けくださったみなさま、運営に協力いただいた客員研究員と所員のみなさまに、心からの感謝をお伝えしたい。

4月には新たな所員と客員研究員をお迎えし、執行部も改まる。春の別れの寂しさは募るが、巡ってきた開花の季節の新たな出会いを楽しみに新年度を迎えることとしたい。

たなか・ゆうすけ（主任）

研究所活動（2024 年 12 月～2025 年 3 月）

中国近現代キリスト教研究プロジェクト公開シンポジウム

開催日時：2024 年 12 月 7 日（土）9：30～17：45

開催場所：立命館大学大阪茨木キャンパス A 棟 3 階

AN323・324・325 教室

発表①土肥歩 研究所協力研究員

「日刊紙『順天時報』にみえる日本人の中国キリスト教伝道認識」

発表② 三野和恵 研究所協力研究員

「Modernity, Colonial Issues, and Dream of Cosmopolitanism: Peggie C. Moody's Missionary Literature on Children in Japanese Colonial Taiwan」

明治学院大学キリスト教研究所公開研究会

開催日時：2025 年 2 月 22 日（土）14：00～17：00

開催場所：白金校舎本館 9 階 92 会議室

司会・コーディネーター：榎木憲一郎（研究所客員研究員）

講師：山脇直司（東京大学名誉教授）

「共通善と現代社会——カトリックの公共哲学」

講師：稲垣久和（研究所協力研究員）

「主権の脱構築——プロテスタントの公共哲学」

キリスト教主義教育研究プロジェクト主催授業研究

開催日時：2025 年 3 月 15 日（土）10：00～11：30

開催場所：白金校舎本館 9 階 92 会議室

発題 1：吉田忍（研究所所員）キリスト教の基礎から

発題 2：崔善愛（研究所協力研究員）現代社会とキリスト教から

明治学院大学キリスト教研究所 3 月研究会

開催日時：2025 年 3 月 15 日（土）14：00～17：15

開催場所：白金校舎本館 9 階 92 会議室

司会：田中祐介（研究所主任）

発表①：キルケゴールとマーテンセン：十九世紀デンマー

クにおけるキリスト教と政治

発表者：鹿住輝之（研究所客員研究員）

コメンテーター：小池直人（岡崎女子大学非常勤講師）

発表②：キリスト教社会論理の学際研究と牧師研究～富阪キリスト教センター50 年の歩みをふりかえって～

発表者：岡田仁（研究所所員）

コメンテーター：植木献（研究所所員）

キリスト教文学・音楽研究プロジェクト研究発表会

開催日時：2025 年 3 月 22 日（土）14：00～17：00

開催場所：白金校舎本館 9 階 91 会議室

テーマ「音楽による神の愛の表現 第 6 回」

司会・発表①：加藤拓未（研究所協力研究員）

「バッハは 1725 年に《受難オラトリオ》を作曲したのか？」——BWV1 Anh. 169 のイエスの“愛のアリア”をめぐって

発表②：近松博郎（研究所協力研究員）

「バロック時代中期のウィーンにおけるミサ作曲様式の再検討」

新着図書

- ・『福音と世界』No. 1、新教出版、2025。
- ・『福音と世界』No. 2、新教出版、2025。
- ・『福音と世界』No. 3、新教出版、2025。
- ・『近代中国社会におけるキリスト教と宣教師』渡辺祐子著、かんよう出版、2025 年。
- ・『キリスト教文化事典』キリスト教文化事典編集委員会編、丸善出版、2022 年。

あんげろす AΓΓΕΛΟΣ

とは、「メッセンジャー」・「天使」の意。

あんげろす 第96号

2025年3月10日 発行

明治学院大学キリスト教研究所
〒108-8636 東京都港区白金台 1-2-37
TEL:03-5421-5210 / FAX:03-5421-5214
Email: kiriken@chr.meijigakuin.ac.jp

題字：澁谷 浩